

中国の「社会主义初級段階」

新型コロナウイルスが猛威を振るっている。新型と言われるウイルスも長年自然界には存在していた。人類と遭遇したのが最近というにすぎない。

たところにまで入り込んで、だために人類に感染したものだ。これが世界的規模での物流、人の動きによつて、急速に拡大さうた。資本主義がもたらした自然災害だ。

資本主義が続く限り今後も同様の自然災害は避けられない。資本主義

社会に替わる未来社会いかに展望するか、ます問われている。

実施、民主主義の確立などは「不十分」な現実に置かれている。

を告発する人びとの発言
を封じ込めるのが、現在
の中国社会の特徴となつ

達しない。

度」の進展として位置付けて いるが、この体制のもとでは「民主制度」は

100

資本主義的生産はその
当然の帰結として、企業
の巨大化をもたらし、企

解決することはできな
い。

対等な連合が必要になる。人びとは、自己統社会を運営する力量、

進展しない。ここから会主義に至るには、「**主制度**」の質的発展が必要である。政治体制の革が不可欠である。中共産党は現代社会を「**会主義**」と規定することによって、社会主義の治制度から遠く離れてまつてはいる。

「1%の富者と99%の民衆」といわれるようになって、それがいつものまで広がっている。資本主義がもつとも先行しているアメリカで、その格差が顕著になつてゐる。資本主義のやり方は、人類に生存条件を壊し始めていた。

対し、人と人、人と自然の共存、助け合いの価値を求める方向に大きく変化している。いま、資本主義の擁護者は、戦争貧困、自然破壊という二類の生存条件を脅かして、いる事柄に対し解決する手段を持っていない。資本家政府に要求して

いが、全産業を総合して自律的に経済運営をするためには一定の大きさのものが必要だ。

人民の自己統治社会は、自律的経済を運営する広さを持つたひろがるものもとに組織される。国的、世界的には自己治社会（コムニーン）

論について

二、人民の自己統治社会（コンニクーン）と社会主義

資本主義から社会主義 — れ、共産党独裁

一、中国の「社会主义初級段階」論

中国共产党は、1987年開催した第13回大会の政治報告で「中國の特色ある社会主義の道に沿って前進しよう」を採択した。この大会で総書記に選出された趙紫陽は、中国の現状を「社会主义初級段階」と規定した。

「わが国の社会主義初級段階は、しだいに貧しさや遅れを克服していく段階である。農業人口が多数を占める現代化された工業国に変わっていく段階である。」自然経済、半然経済が大きな比重を占めるものから、商品経済

綱領論争！新しい左派共同政治勢力へ



▲ 6・4天安門武力弾圧事件から31年（写真は1989年5月の北京）

資本主義の遺物である人民が自己統治する社会では、巨大市場は必要としない。未来社会は第一次産業、第二次産業等三次産業の発達した産業のものと、需要と供給のバランスの取れた一定の広さを持ったひろがりをもつて組織される。資本主義が世界市場を条件にして作り上げた巨大企業は不必要だが、一定規模を持った企業は人民の生活を豊かにするためには必要である。何が必要で、どれほどの量を生産する必要があるのかを計算し、計画するために比較的狭いひろがりが良

多くの時間を取りられていくが、過渡期の社会では、効働時間は短縮され、民主主義を獲得するための多くの時間を得ることが出来る。これが、人が民主主義を獲得する訓練は飛躍的前進する。
反戦、反貧困、自然保護のたたかいは、資本主義の枠内では根本的な解決はない。これらのたたかいは未来社会の展望結び付けられてこそ、決の糸口が開かれてる。未来社会の展望とそれを意識化した、実力を持った革命政黨の建設不可欠である。(了)

村役人などへ徹底した打ちこわし

▼堀込 純一

III 維新政府と対立する初期農民闘争

(4) 最も飢饉にさらされた 東北での闘い

(i) 転封・献金要求をうけ 自ら廢藩を願い出

東北の戊辰戦争は、最後まで戦った盛岡藩が1868年(明治元年)9月25日に降伏し、終つた(戊辰戦争全体の終日)。

10月10日、盛岡藩(南部藩)は、新政府から7万両の賠償金を課せられ、盛岡城下には秋田(久保田)藩兵が進駐した。盛岡藩は、仙台藩とともに一度領地を没収され、13万石が与えられた。20万石から13万

石への減封である。しかも、旧仙台領の白石への転封が命令された。

「仙台藩は62万石から28万石への減封」

盛岡藩・仙台藩から没収された地は、新政府の直轄地となり、以下の諸藩が1868年(明治元年)12月7日および同23日に、管理・取り締まりを命ぜられた。

藩が1868年(明治元年)7月17日付けの大久保利通宛ての書簡『木戸孝允文書』(三)で、木戸孝允は東北諸藩の占領地について、人心を鎮め安定期させるのが肝要なので、「一先ず人心の安堵(あんど)」仕り候處(そろうところ)までは大中藩の内(うち)一藩へ丸に御任(おまか)せ」を主張している。すなわち、新政府が直に統治するのではなく、勤皇派の諸藩に取締りを委任する方法を主張している。その理由は、「一万」新附の地(ち)初発處致(処置)を誤り申し候ては大に人心に相係(あいかわ)り、随つて朝威も相立たず、後來の処(ところ)御難渋にこれあるべきか(仕り候)といふものである。天皇・朝廷をかげて権力を奪つた薩長らしき、天皇制の權威を傷つける。天皇・朝廷をかげて権力を奪つた薩長らしき、天皇制の權威を傷つけるために、大中藩に委任するという、姑息で小狡(こずる)い方法をとつたのである。

1869年(明治2年)1月には、北郡・三戸

岩手・閉伊(へい)・九戸・鹿角(かづの)の9郡は、松本・松代藩、二戸・三戸・北の3郡は弘前藩などである。だが、翌年2月には、弘前藩の代わりに黒羽藩が、沼田藩に代わり前橋藩が管理・取締りを命ぜられた。

これに先立つ1868年7月17日付けの大久

保利通宛ての書簡『木戸孝允文書』(三)で、木戸孝允は東北諸藩の占領地について、人心を鎮め安定期させるのが肝要なので、「一先ず人心の安堵(あんど)」仕り候處(そろうところ)までは大中藩の内(うち)一藩へ丸に御任(おまか)せ」を主張している。すなわち、新政府が直に統治するのではなく、勤皇派の諸藩に取締りを委任する方法を主張している。その理由は、「一万」新附の地(ち)初発處致(処置)を誤り申し候ては大に人心に相係(あいかわ)り、随つて朝威も相立たず、後來の処(ところ)御難渋にこれあるべきか(仕り候)といふものである。天皇・朝廷をかげて権力を奪つた薩長らしき、天皇制の權威を傷つけるために、大中藩に委任するという、姑息で小狡(こずる)い方法をとつたのである。

1869年(明治2年)8月には創設された九戸県と藩内抗争の激化をみて、新たに献金未納分の代償として、3・5万石を差し出すように要求した。

(ii) 戊辰戦中から戦後へ うちつづく農民一揆

10月22日、南部藩(現・北上市更木町)では、戊辰戦争が未だ終わっていない1868年6月廿三日夜、村内の者共(ものども)最初は六月廿三日夜、村内の者共(ものども)最初は

盛岡藩の和賀郡更木村(現・北上市更木町)では、戊辰戦争が未だ終

わっていない1868年6月廿三日夜、村内の者共(ものども)最初は

盛岡藩の和賀郡更木村(現・北上市更木町)では、戊辰戦